

教育ボランティア

活動から学んでいます

夕涼みの会の活動から

初等教育学科 1年 國清 祐帆

私は、ボランティアの経験がほとんどないので、楽しみという気持ちと不安な気持ちがありました。周りの人たちに助けられて無事に終えることができました。私は、飲み物のお店の担当で、氷の入ったバケツからペットボトルを取り水分を拭いて渡す係をしました。特に、販売が終わ



た後の氷の処理が大変でしたが、周囲の人たちと時間をかけてやり通しました。小学生が楽しんでいる姿を見たり実際に教育現場で働く先生方と接したりすることができ、「ありがとう」や「お疲れ様」と言われると嬉しい気持ちになり、やってよかったと思いました。

初めての経験

初等教育学科 1年 新井 詩織

ボランティアに初めて参加させていただき、一つの行事を作り上げることはとても大変なことだと感じました。私は夕涼みの会で飲み物のお店を担当させていただきましたが、準備から片付けまで全てを行いました。夕涼みの会の最中は、子どもたちにどこまで仕事を任せるのか、どう補助につくのが子どもたちにとってよいのかなど、常に子どもたちを中心に考えているということが、印象的でした。ボランティアの活動を通して、先生方の動きからもっと多くのことを学びたいと改めて強く思いました。

未来塾

「人間開発は人づくり」をモットーに！

平成24年度未来塾「柔道基礎力養成講座」に関する報告

人間開発学部 教授 上口 孝文

今年度の「柔道基礎力養成講座」は、火曜4限8回、土曜2限8回実施された。火曜4限の受講者は、延べ28名、土曜2限の受講者は、延べ62名、合計90名であった。

受講者(男性4名、女性4名)は、ほぼ全員が初心者で、教員志望、公務員志望の学生である。

柔道の昇段には様々な条件が設定されている。次の昇段審査への期間は最短で2年間とされているのも条件の一つである。初心者から初段を取得するまで、通常は1年半から2年程度の練習期間が必要であると言われていたが、この講座では数か月間で、柔道の基本動作、対人技能を習得しながら昇段審査に挑戦していく講座でもある。受講学生は、礼法、受身、投技、固技、投の形の習得など、厳しい指導にもかかわらず熱心に受講し、8名全員が初段の資格を取得した。受講学生が授業の空き時間を有効に活用しながら、主体的、積極的に取り組む姿勢と、努力の継続に担当教員として敬意を表し、感謝したい。



思ひ草

國學院大學人間開発学部教育実践総合センターだより

第9号

平成24(2012)年12月27日 発行

「『頑張ることを応援する』教師に～10点満点人生から学ぶ～」

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



10月28日、今年も本学部において「第3回共有フェスティバル」が開催されました。生憎の雨にもかかわらず、昨年よりも100名多い800名を超える参観者で、会場は一杯になりました。学生たちも汗だくで対応してくれました。昨年の本フェスティバルの子育て対談の相手は、サッカー評論家の北澤毅氏でした。今年のそれは、森末慎二氏。

森末氏は、1984年ロサンゼルスオリンピックで「金(鉄棒)、銀(跳馬)、銅(男子団体)」3つのメダル獲得だけでなく、39度という高熱の中、個人種目別鉄棒で3回の鉄棒演技すべて10点で30点満点、という快挙をなすとげました。森末氏の金メダル人生の裏側で、「教育の前に、人間開発あり」という本学部の教育理念と軌を一にする子育て論がありました。すなわち、「頑張ることを応援する」です。

(1) 何事もポジティブな発想と姿勢で

森末氏は大学3年生の時左足を、さらに4年生の時右足のアキレス腱を切りました。この時はさすがに、ショックだったようです。だが、恩師の励ましの言葉が後押ししました。「よかったな。これで両足一緒になったな」。痛い、痛いと言っても治

ることは無い、と何事も前向きに受け入れる姿勢が、こうして築かれていきました。

(2) まずは指導者自身が元気に熱中

森末氏は、厳しい特訓を受けて来たのに、「努力」という言葉は嫌いだと明言します。これだと思ふ熱中したものを見つければ、それは好きでやっているわけだから、もう努力ではないというのです。子どもに夢を持ちなさいと言う前に、指導者自身が好きなことを見つけ、とことん熱中することが大切、と森末氏は力説します。

(3) 子ども自身に主体的に考えさせる

しつけ面で、大事なことはしっかり教えるべきです。しかし、その一方で、森末氏は常に、「自分でなんとかする」ことを、親から教えられて育ったと言います。この主体性の保証が、森末氏の頑張る姿勢づくりを応援し続けたのです。

本学部の学生たちも、「頑張ることを応援する」良き教師、指導者になって欲しいと願います。

教え、見まもり、引き出す共有

教育実践総合センター副センター長 なつあき ひでふさ 夏秋 英房



さる12月6日に教育インターンシップ連絡協議会が開催されました。学生の発表のあと、ご協力・ご指導を頂いている先生方から暖かくも厳しい講評をいただきました。

先生方曰く、人を育てるというもっともやりがいがあり、かつ困難で責任もある教職に就くことに自分は向いているのか、見極める覚悟で臨んでほしい。折れない心と豊かな感受性をもつように。子ども達の発達段階に応じてかわりつつ子どもとしっかりと向き合って、その成長を待つ態度がほしい。子どもは学生の本質を見抜くものだ。学校で教職員や保護者にあいさつする態度や、現場から自分の力で学ぼうとする意識を持つことなど、基本を備えてほしい、等々。

忌憚のないご意見をいただき、後進を育成しようという根底にある熱い想いからのお言葉に、出席している学生達も真剣に聞き入っておりました。

ところで最近、『銀の匙』というマンガが話題を呼んでいます。

北海道の農業高校酪農科に入学した都会育ちの主人公が、数多くの実習経験や酪農家でのアルバイトをとおして、また自分とは全く異なる生活や価値観のなかで育った級友と寮生活を送るなかで、迷いうろたえつつ成長していく酪農青春グラフィティです。さまざまな経験をとおして、主人公は命や自然、食、社会や自己の在り方などに真摯に向き合わざるを得なくなります。

その主人公を見守るプロの酪農家や学校教師、保護者達のかかわりをとおして、「教え」「見守り」「引き出す」という共有のあり方がユーモアたっぷりに描かれています。

6日の協議会で発表した学生達も、つたない言葉ながら、コミックの主人公さながらに真面目に取り組み迷いとまどい格闘し、学んだことについて語っていました。インターンシップ終了後も学校に通わせて頂き、教育実習へとつながる学びが実現していることを実感いたしました。大学教員も学生と共に、共有のあり方を今後も探求していきたいと考えております。